

## 革命ではなかった『Hamilton』

法学部法律学科 4 年 若松 彩音

- I. 序論：ブロードウェイミュージカル『Hamilton』の非白人性の意義
- II. 非白人のブロードウェイミュージカルの歴史
  - (1) アフリカ系アメリカ人キャストの席卷
  - (2) 現代のブロードウェイミュージカル
- III. 「現代のアメリカによって語られる建国時のアメリカ」の『Hamilton』
  - (1) 白人以外の白人以外による白人以外のためのミュージカル
  - (2) 『Hamilton』にみるブロードウェイミュージカルの DNA
  - (3) 『Hamilton』が生み出した DNA
- IV. 結論：革命ではなかった『Hamilton』
- V. 参考文献

### I. 序論：ブロードウェイミュージカル『Hamilton』の非白人性の意義

現在最も手に入りにくいブロードウェイミュージカルのチケットといえば、『Hamilton』（2015 年）が挙げられるだろう。同作は、アメリカ建国の父の一人であるアレグザンダー・ハミルトンの半生を、ヒップホップの音楽で描いた作品である。また、その特徴として、ラテン系アメリカ人やアフリカ系アメリカ人を主要キャストに用いたことが挙げられる。かつて、白人のキャスティングが中心であったブロードウェイミュージカルにも変革が起きているのだ。一方で、同作のオーディションにおいて、白人でない男女に限ったキャスト募集（図 1）が行われ、議論を呼んだ<sup>1</sup>。ラテン系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人と

【図 1】 2016 年 3 月に発表された『Hamilton』のキャスト募集

<sup>1</sup> Ghananation, “Is Broadway smash Hamilton racist? Casting call asks specifically for ‘NON-WHITE’ actors.”

いった、アメリカ史上でマイノリティと呼ばれる人々に、舞台を立つ機会を創出しておきながら、白人に機会を与えないことは、『Hamilton』という作品にアメリカ革命時の「All men are created equal」を体現した価値を見出していた人びとにとっては、衝撃的であった。近年、Norm Lewis や Kyle Jean-Baptiste、Nikki M. James らが活躍し、『The Phantom of the Opera』(1986年)や『Les Misérables』(1980年)といった伝統的な名作ミュージカルの主要キャラクターに白人以外が起用される動きもある中で、ブロードウェイミュージカルは人種をどのように捉えてキャスティングされるべきなのか。果たして旋風を巻き起している『Hamilton』はブロードウェイ史における革命といえるのだろうか。

## II. 非白人のブロードウェイミュージカルの歴史

---

かつて、ブロードウェイミュージカルは、白人キャストが演じるロマンス主体のストーリー展開が全てであった<sup>2</sup>。2014年の時点で、70人以上のアフリカ系アメリカ人が、ブロードウェイでのパフォーマンスを評価されるようになるまで、非白人のキャストたちが歩んできた道は決して簡単なものではなかった。

### (1) アフリカ系アメリカ人キャストの席卷

ブロードウェイの舞台にアフリカ系アメリカ人が立つようになったのは、1898年だと言われている。その当時は、アフリカ系アメリカ人のみで構成されるカンパニーで上演していた。トニー賞受賞に至ったのは、1950年のJuanita Hallが初だ。以降も、アフリカ系アメリカ人のカンパニーによる公演が続くが、注目を集めたのは1960年代である。1967年、1964年にヒットした『Hello, Dolly!』(1964年)がアフリカ系アメリカ人をリキャスティングして再演された。このヒットを皮切りに、『Pajama Game』(1954年)など他のミュージカルもまたオールブラックキャストによる公演が行われるようになっていった<sup>3</sup>。アフリカ系アメリカ人と白人が同じ舞台に立つことがなかった背景として、当時は、「分離すれども平等」がまかり通る社会であったことが挙げられる。その原則は劇場内においても同様であり、1954年にブラウン判決があっても、二つの人種が同じ舞台に立つことはなかった。しかし、オールブラックキャストによる名作ミュージカルのリバイバルの潮流により、アフリカ系アメリカ人は、たしかに劇場における地位を確立したといえる。

1970年代、オールブラックキャスト上演作品がヒットする流れで、アフリカ系アメリカ人や南部を舞台としたミュージカルが生まれるようになった。『Purlie』(1970年)や『Raisin』(1973年)といったトニー賞を受賞する作品もこの時期である。これらのミュ

---

<sup>2</sup> S. E. Wolf, *Changed for Good: A Feminist History of the Broadway Musical* (2011).

<sup>3</sup> W. Hoffman, *The Great White Way: Race and the Broadway Musical* (2014), pp. 113-142.

ージカルは、アフリカ系アメリカ人の作曲家（Fats Waller や Eubie Blake など）によって制作され、舞台上における黒人の席卷だけでなく、制作側においても活躍がみられるようになった。メガヒットとなった『The Wiz』（1974年）は、童話『The Wizard of Oz』が基となっていることから、白人文化をベースとしたミュージカルと捉えられるかもしれないが、アフリカ系アメリカ人の観点からストーリーを再構築しており、アフリカ系アメリカ人によるミュージカルと言える。この時期のミュージカルは、アフリカ系アメリカ人のアフリカ系アメリカ人によるアフリカ系アメリカ人のためのものであると言えるのではないか。それまで白人による潮流によって成り立ってきたブロードウェイミュージカルに、ひとつの大きな潮流をアフリカ系アメリカ人がもたらすことになった時代であった。

## （2） 現代のブロードウェイミュージカル

アフリカ系アメリカ人の席卷以降、ブロードウェイミュージカルは、より人種の多様性を舞台上に取り入れていった。移民国家であるアメリカには、ラテン系、アジア系の人びとが流入し、それに伴った舞台設定や役も増えていく。『Miss Saigon』（1989年）はベトナムが舞台で、アジア系のキャストが必要とされる。『A Chorus Line』（1975年）は、イタリア系移民に、チャイナタウン出身、ハーレムのスペイン街出身のプエルトリコ人と、キャラクター設定が様々で人種の異なるキャストが揃う舞台である。序論でも記した通り、初演では白人が演じた名作ミュージカルの数々も、主要キャストに非白人を受け入れている。ブロードウェイミュージカルは、かつて白人のみであったが、アフリカ系アメリカ人だけの舞台を経験した後に、人種の違う人々が同じ舞台上に上がることが可能になって、よりカラフルな舞台へと変遷しているのだ。

## III. 「現代のアメリカによって語られる建国時のアメリカ」の『Hamilton』

---

1970年代のアフリカ系アメリカ人がつくりだした潮流で生まれたブロードウェイミュージカルや、多様な人種をとりいれるミュージカル作品の増加に伴って、非白人は、より活躍の場を広げている。が、まだその数は、白人が舞台に立てる機会と比較して少ない。アフリカ系アメリカ人が舞台を席卷した潮流から40年、『Hamilton』は、遅れてやってきた、白人以外の白人以外による白人以外のためのミュージカルの潮流といえる。

### （1） 白人以外の白人以外による白人以外のためのミュージカル

『Hamilton』は、King George 役以外の主要キャストに、ラテン系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人がキャスティングされている。歴史上に実在し、もちろん白人である建国の父を有色人種のキャストで演じるに至った Lin-Manuel Miranda（『Hamilton』の脚本・

作詞・演者である)の思いは、人口の13%は他国生まれの人々で、マジョリティ、マイノリティがいつかはなくなるであろう現代のアメリカを、教科書で語られる歴史ではなく、歴史を現代に置き換えるとどうなるかを表現したかったとしている。そして、彼は、現代のアメリカを映し出すことで、観客と作品の距離が近づき、作品としての成功にもつながるとも語っている<sup>4</sup>。脚本のもととなった『Alexander Hamilton』を書いた Ron Chernow も、歴史家として製作に関わっている。Chernow 自身、白人以外の役者が建国の父を演じることに驚いたが、『Hamilton』は、建国時のアメリカの物語であって、今のアメリカによって語られる (This is a story about America then, told by America now.)<sup>5</sup>、という点で、Miranda と二人の意見は一致した。ミュージカル『Hamilton』のコンセプトには、人種が多様な「現代のアメリカによって語られる建国時のアメリカ」があるのだ。

また、題材となる建国時のアメリカにいた人々は、建国の父も含め、アメリカ大陸に移入してきた、当時の移民であった。劇冒頭で表される Alexander Hamilton は、「a bastard orphan son of a whore and a Scotsman/ Dropped in the middle of a forgotten/ Spot in the Caribbean」(歌詞)<sup>6</sup>であり、偉大なる建国の父のイメージとは異なるが、Hamilton の事実なのである。また、『Hamilton』に描かれる Hamilton は、おしゃべりで、自分の意見を持っているところはニュー Yorker 気質であるが、同時に、勤勉で、野望をもち、自己実現しようとする点では、移民の気質を持ち合わせているといえる<sup>7</sup>。移民国家アメリカを建国した移民 Alexander Hamilton を題材としたミュージカルであるから、白人のみでなく、白人以外の「移民」が演じられる要素をそこに見出すことができるだろう。

『Hamilton』を製作し、主役 Hamilton を初演で演じているのはプエルトリコ系移民の子である Lin-Manuel Miranda である。『Hamilton』を大ヒットに導く以前、彼はアッパーマンハッタンに住む移民たちの舞台『In the Heights』(1999年)を手掛け、4つのトニー賞を受賞した。その他にも、『West Side Story』(1961年)をスペイン語翻訳している。これらの作品は、全てラテン系キャストが舞台に立つ機会を創出していると言える。彼はインタビューにおいて、ラテン系アメリカ人が主要キャストとして関われるブロードウェイミュージカルを挙げるが、3つのみである<sup>8</sup>。本人もラテン系アメリカ人であることを踏まえても、ラテン系アメリカ人が舞台に立つ機会が与えられることの少なさに対する危機感を持っていることは推測できる。Miranda は、ラテン系アメリカ人として舞台に立つことを制限されることへの危惧を持ち、ラテン系アメリカ人が舞台へ立つ機会を創出することを使命と感じているであろう。その Miranda という白人以外によって、白人以外のためにつくられた白人以外のミュージカルが『Hamilton』であり、アフリカ系のアメリカ人らの潮流から遅れて、やっとラテン系アメリカ人にまでやってきた大きな流れなのだ。

---

<sup>4</sup> PBS News Hour, “Hip-hop and History Blend for Broadway Hit ‘Hamilton.’”

<sup>5</sup> Lin-Manuel Miranda and Jeremy McCarter, *Hamilton, The Revolution* (2016), p. 33.

<sup>6</sup> Original Broadway Cast Recording, *Hamilton: An American Musical* (2016).

<sup>7</sup> Miranda and McCarter, p. 38.

<sup>8</sup> PBS News Hour.

そして、Miranda がキャスト募集にあたって、主要キャストのイメージを明らかにしている。男女や声の高さ、ラップの技術のみでなく、そのイメージを現代に実在する人物とブロードウェイミュージカルの登場人物で表す。[表 1]

Alexander Hamilton	Eminem と Sweeney Todd 『Sweeney Todd』 (1979)
Eliza Hamilton	Alicia Keys と Elphaba 『Wicked』 (2003)
Angelica Schuyler	Nicki Minaj と Desiree Armfeldt 『A Little Night Music』 (1973)
Aaron Burr	Mos Def と Javert 『Les Miserables』 (1980)
George Washington	John Legend と Mufasa 『Lion King』 (1997)

[表 1] 主要キャストイメージ例一部<sup>9</sup>

各キャラクターのモデルを明らかにしているが、そのエスニシティは多様であって、もともと白人は想定されていない。

現在、白人以外を要件とした当初のキャスト募集は改められ、白人をも応募できるようになっている。しかし、実際、白人ばかりがオーディションを通じて集まり、主要キャストがオールホワイトで行われたとき、この章において述べてきた Miranda が意図した『Hamilton』という舞台、現代の人種多様なアメリカを映した建国の様子は、舞台上に表現しえないのである。「白人以外」のキャスト募集は、ただ、ブロードウェイミュージカルのキャストिंगにおいて語られてこなかった人種の壁が明らかになったにすぎない。白人以外が舞台に立つことのなかったブロードウェイ前史においては、オーディションのために人種を指定する必要はなかった。近年、伝統的な、白人が演じてきた役に、実力のある非白人が採用される挑戦的なキャストिंगを除いては、作品におけるキャラクターの出身地や、過去に起用されてきたキャストを踏まえて応募するため、キャスト募集の際に、必要とされる人種について言及する必要がなかっただろう。『Hamilton』が今回問題となったのは、作品のアイデアに「白人である建国の父を非白人が演じる」ことがあったため、その新たな発想がオーディションにエントリーする側に混乱を生むことを加味し、「白人以外」と明記するに至ったのではないか。新しいアイデアのため、明言を避けざるを得なかっただけで、『Hamilton』は今までのミュージカルの伝統に則った、キャストिंगに人種間の壁が存在するもので、ただ白人のためでも、アフリカ系アメリカ人のためでもなく、この点だけ新たに非白人のためのものであるだけなのだ。ブロードウェイミュージカルは、継続して人種の壁をこわすために、新たな作品を生み出し続けている途中なのである。

<sup>9</sup> Broadway World, “Hamilton to Hold Broadway Auditions This Month; Read Lin-Manuel Miranda’s Character.”

## (2) ブロードウェイミュージカルの DNA

ヒップホップを取り入れて、ラップで舞台がすすむ『Hamilton』は、たしかに革新的である。が、ブロードウェイミュージカルは、以前からジャズやロックを取り入れてきており、ブロードウェイ史においてジャンルの異なる音楽を取り入れることは、既に起こっていたことなのだ。『Hair』(1967年)で初めて、ブロードウェイミュージカルのナンバーにロックを取り入れて以降、ブロードウェイミュージカルはロック中心になるかのように思われたものの、『Rent』(1994年)によって、ロックはただブロードウェイミュージカルの DNA であるだけとすることに成功した。Miranda 自身、ロックがそうであったのと同様に、ヒップホップをブロードウェイに DNA として『Hamilton』が持ち込んだにすぎないとしている<sup>10</sup>。また、Miranda が『West Side Story』(1957年)をスペイン語翻訳して以来、つながりのある一人に、多くのブロードウェイミュージカルを生み出した名作曲家・作詞家の Stephen Sondheim がいる。彼がつくった『Into the Wood』(1986年)の冒頭こそが、ヒップホップを取り入れる兆しであったと Miranda は言う<sup>11</sup>。ヒップホップ中心のミュージカルは、ブロードウェイ初であるが、ジャンルの異なる音楽を取り入れていくことは、いまや、ブロードウェイで目新しいことではなく、それをもって「革命」とは言い難いのである。

さらに、『Hamilton』のプロットには、伝統的なブロードウェイの名作ミュージカルと共通した要素を多分に含んでいる。アメリカ人が愛してやまない初代大統領 George Washington を、Hamilton を起用した英雄として描いたり、主役の Hamilton が言葉にするだけでなく実行する魅力的な人物であるところ、多くの部分で語り手となる Aaron Burr に人間の弱さを見出せるところと、人物描写に優れていることは、もちろんである。なにより、従来のブロードウェイミュージカルと共通する点は、アメリカ建国時の立役者たちの政治性や、アメリカ独立戦争のアクション性だけでなく、『Hamilton』にロマンスの要素を盛り込んでいることにあるのだ。『Hamilton』では、後に Hamilton の妻となる Eliza Schuyler とその姉妹が、主要キャストとして設けられている。そして、その Schuyler 三姉妹のうち、Angelica と Eliza が Hamilton のことを愛する三角関係である。もちろん、Hamilton の半生をたどるミュージカルにおいて、彼が没落することとなるマリア・レイノルズ事件は当然描かれるべきことで、Maria Reynolds の誘惑が“Say No to This”のナンバーで歌い上げられる。そして、Eliza がエンディングでみせる一貫した Hamilton に対する愛情と、ハミルトンが決闘前に Eliza にかける“Best of Wives and Best of Women”は、ミュージカルファンが愛してやまないミュージカルにおけるロマンスを完成させている。そればかりではなく、「家族」のコンテクストを取り入れたことも、多くの人に受け入れられる要因である。“Dear Theodore”では、物語を通して終始対照的な Hamilton と

---

<sup>10</sup> Miranda and McCarter, p. 196.

<sup>11</sup> Miranda and McCarter, p. 174.

Burr の二人が、子どもを想ってデュエットをする。

I swear that I'll be around for you / I'll do whatever it takes / I'll make a million mistakes / I'll make the world safe and sound for you ... / ... will come of age with our young nation/ We'll bleed and fight for you, we'll make it right for you. / If we lay a strong enough foundation / We'll pass it on to you, we'll give the world to you /And you'll blow us all away.... Someday, someday.

建国を成し遂げた偉人たちでありながら、アメリカをつくりだしたその原動力のひとつが、我が子であり、たとえ間違いをおこしながらも次の時代を形にしようとする想いは、人々の胸をうつ。『Hamilton』はそのプロットに、今までもそうであり、これからも続くであろうブロードウェイミュージカルでヒットするための要素である「ロマンス」と「家族愛」をおさえているのだ。

### (3) 『Hamilton』が生み出した DNA

これまで、『Hamilton』を伝統的なブロードウェイミュージカルの流れをくんだ一つのミュージカルとして考察してきたが、同時代につくられたミュージカルの中でも、その躍進はめざましい。その理由は、ヒップホップを取り入れることで残した DNA と同じように、次世代ブロードウェイミュージカルが引き継ぐであろう DNA を『Hamilton』が多く残すことによる。

一つめの DNA として、非白人のくくりの中で人種の壁をなくしつつあるということだ。主役である Alexander Hamilton は初演以来、Miranda によって演じられていた。次に同役を演じることとなった Javier Muñoz もまた、プエルトリコ系アメリカ人である。が、アメリカ国内ツアーでは、アフリカ系アメリカ人の Michael Luwoye が同役を演じることが決定している。また、Eliza 初演キャストの Phillipa Soo は中国の血が流れるアジア系アメリカ人といえる。白人以外のためのミュージカルは、白人以外であればどの役にもつける可能性が大きいのである。

二つめの DNA は、やはりヒップホップを取り入れたことである。20 世紀の Rodgers & Hammerstein の黄金時代以降のミュージカルは、曲の間にシーンをはさんですすむことがスタンダードになった。しかし、『Hamilton』では、登場人物たちはラップにのせて会話や語りをするため、シーンをはさむ必要性がなく、曲のみで進行する。また、ラップで言葉を多く入れることが可能になり、ほぼ 24,000 語<sup>12</sup> も含まれているのだ。ヒップホップを取り入れたことで、より多くの言葉を伝えることが可能になり、多くの言葉を必要とするテーマ性の強いミュージカルをつくることができるようになった。

---

<sup>12</sup> Miranda and McCarter, p. 250.

三つめのDNAは、『Hamilton』という作品全体で多様なナンバーがみられることに加え、ジャンルの異なる音楽を一つの楽曲に対して取り入れていることだ。“Cabinet Battle”での派手なラップバトルが目につくが、Elizaが傷心を歌う“Burn”はミュージカルにありがちな落ち着いたバラードであるし、King Georgeが歌い上げるのはバッハをイメージしながらヒップホップを取り入れてつくられた<sup>13</sup>“You’ll Be Back”など、その楽曲は多様だ。“Say No to This”は、Hamiltonがラップを歌う中で、Maria周辺のコーラスはR&Bで歌い上げ、さらに夫James ReynoldsがHamiltonと別の曲調でラップをする楽曲だ<sup>14</sup>。ミュージカル全体を通して、楽曲一つを通して、『Hamilton』は別ジャンルの音楽をつかって、多様性を受け入れることに成功したのだ。この楽曲における多様性の受容は、それを歌うキャストたちをも多様にさせる。新たなミュージカルが多様なジャンルの音楽を用いた楽曲を使用することで、歌手の多様性をも重要となって、白人と非白人が舞台に立つチャンスを、同じだけ持つことができる作品の創出へとつながっていくのではないか。

#### IV. 結論：革命ではなかった『Hamilton』

---

ラテン系アメリカ人やアフリカ系アメリカ人が、白人である建国の父を演じることで注目を浴びた『Hamilton』ではあるが、実際は、そのキャスティングは人種の壁を取り払ったキャスティングであったとは言い難い。『Hamilton』はLin-Manuel Mirandaというラテン系アメリカ人がまきおこした、白人以外による白人以外の白人以外のためのミュージカルの潮流なのだ。この潮流は、1970年代にアフリカ系アメリカ人がブロードウェイミュージカルに台頭した潮流と似ていると言える。そのため、『Hamilton』はミュージカル史における「大革命」とは言えない。あくまで、ブロードウェイミュージカル史の変遷のひとつなのである。しかし、伝統的なブロードウェイミュージカルのエッセンスを持ちながらも、白人以外にとっては人種の壁のないキャスティングがされること、ヒップホップを取り入れて、より多くの言葉を観客に伝えるのを可能にしたこと、その楽曲の多様性が次世代ミュージカルでのキャストの多様性を牽引し得ることは、『Hamilton』が注目され、称賛される理由であろう。

Mirandaは、「How lucky to be alive right now」(“The Schuyler Sisters”の歌詞)を日々自分に言い聞かせているという<sup>15</sup>。白人以外の人々が、まだブロードウェイで活躍の機会を多く与えられなかった現代で、Mirandaは『Hamilton』を通して、彼らにスポットライトを浴びることを可能にした。まさしく、活躍すべき時代に生まれた彼に、さらなる活躍

---

<sup>13</sup> Miranda and McCarter, p. 47.

<sup>14</sup> Miranda and McCarter, p. 174.

<sup>15</sup> Miranda and McCarter, p. 44.

で、人種に関係なく素晴らしい作品・役者がうまれるブロードウェイミュージカルの潮流へと舵をきることを期待する。

## V. 参考文献

---

### 一次資料

Lin-Manuel Miranda and Jeremy McCarter, *Hamilton, The Revolution*, Little, Brown, 2016.  
Original Broadway Cast Recording, *Hamilton: An American Musical* CD, Atlantic, 2016.

### 二次資料

Broadway World, "Hamilton to Hold Broadway Auditions This Month; Read Lin-Manuel Miranda's Character." <http://www.broadwayworld.com/article/HAMILTON-to-Hold-Broadway-Auditions-This-Month-Read-Lin-Manuel-Mirandas-Character-Descriptions-20150312> 17/02/07.

Ghananation, "Is Broadway Smash Hamilton Racist? Casting Call Asks Specifically for 'Non-White' Actors." <http://www.ghanagrio.com/news/world/248144-is-broadway-smash-hamilton-racist-casting-call-asks-specifically-for-non-white-actors.html> 17/02/07.

Hoffman, W. *The Great White Way: Race and the Broadway Musical*. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 2014.

PBS News Hour, "Hip-hop and History Blend for Broadway Hit 'Hamilton.'" <https://www.youtube.com/watch?v=HAiEVjW-GNA> 17/02/07/

Wolf, S. E. *Changed for Good: A Feminist History of the Broadway Musical*. New York: Oxford University Press, 2011.

浅井英『ミュージカル入門』（東京：荒地出版社、1983）

小山内伸『進化するミュージカル』（東京：論創社、2007）

鈴木透『実験国家アメリカの履歴書：社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』（東京：慶應義塾大学出版会、2003）

本橋哲『深読みミュージカル：歌う家族、愛する身体』（東京：青土社、2011）